



医学部だより

第35号

2017.10.1



徳島大学医学部の近況

医学部長 丹 黒 章

徳島大学蔵本キャンパスは後ろ(南)を眉山、吉野川を北に臨みます。吉野川側から蔵本キャンパスを望むと林立する校舎ビル群の背景は季節とともに移ろう眉山の景色です。卒業式が終わり、入学式が近づくと、キャンパスの真後面にある西部公園を中心に山全体が桜色に色づきます。新緑に、白をまぶした栗の花やハナミズキ、枝垂れ藤の時期を経て、深緑から紅葉へと変わり、そして冬景色へと移ろいます。毎年、このような景色を背に蔵本キャンパスは変遷してきました。かつては陸軍西部第33部隊跡のバラックを利用した平屋建て研究棟、現在の青藍会館の場所には学生寮があり、グラウンドの角に柔剣道場、その南には教授連の官舎の長屋がありましたが、駐車場も高層化し、病棟や研究棟が建ち並んでいます。進行中の歯学部棟の改修工事と同時に徳島県立中央病院との垣根が取り払われ、キャンパス前面の緑地化と道路整備が終われば、蔵本地区「総合メディカルゾーン構想」へ向けた整備がほぼ完成します。

その一方で、国立大学法人が置かれた環境は厳しさを増しており、少子高齢化やグローバル化による国際競争激化などへの対応が急務となっています。平成16年の独立行政法人化から始まった第1期中期目標期間(平成16年度～平成21年度)により国立大学法人が始動し、第2期中期目標期間(平成22年度～平成27年度)では法人化の長所を生かした改革が進められてきました。平成25年にはさらに自主的・自律的な改善・発展を促すミッションの再定義が行われ、平成28年度に第3期中期目標期間(平成28年度～平成33年度)がスタート、徳島大学でも「徳島大学改革プラン」に沿って、教育・研究組織、教員組織の新たな枠組みが決まりました。

蔵本キャンパスにある医・歯・薬学部の全教授が一堂に会して議論してきた大学院ヘルスバイオサイエンス研究部教授会も干支をひと回りして役割を変え、平成29年度からは医学域(医学科及び医科栄養学科)、歯学域(歯学部)、薬学域(薬学部)、保健学域(保健学科)の4つの教員会議などを統合する教員組織となり、各教育部長から独立した研究部長の下、各学域から

選ばれた代議員によって組織運営が行われることになりました。

近年、医学教育にも自己点検と外部評価により教育の質を常に改善することが求められ、欧米先進諸国では、医学教育の分野別認証評価を実施しており、近隣のアジア諸国でも行われるようになりました。平成22年9月にアメリカのECFMG(Educational Commission for Foreign Medical Graduates)から「2023年以降は国際基準で認定を受けた医学部からの出身者にしかECFMG申請資格を認めない」との通告があり、この2023年問題をきっかけに、日本でも「グローバル化に対応した国際的に通用する医師養成制度」を確立すべく、「国際基準に対応した医学教育認証制度の確立」を目指して一般社団法人日本医学教育評価機構(JACME)が設立され、国際基準に沿った分野別評価認証制度が始まりました。徳島大学は平成30年10月にこの分野別認証受審を予定しており、近隣の関係病院での実地修練を含めたより密度の濃い「参加型の臨床実習」を取り入れたカリキュラムを実践すべく準備を進めています。

入試に関しては、平成31年度から、国際性と優れた研究能力を持つ医師を育成する目的で、地域への定着も考慮して四国各県から2名ずつ、定員8名のアドミッション・オフィス(AO)入試を開始いたします。

優れた研究も新技術の開発も優れた人材の育成から始まります。大学に課せられた役割は、より多くの優れた人材を発掘し、徳島大学を起点にグローバルに活躍できる人材を育成する環境づくりだと考えております。季節ごとに様々な植物をいきいきと繁茂させる眉山のようにしっかりとした土壌をつくりたいと思います。近々の教員選考に関しては、機能解剖学分野教授に7月1日付で高知大学解剖学教室の富田江一准教授が着任されました。また、医用画像情報科学分野教授には東京大学医学部附属病院診療放射線管理室長の芳賀昭弘助教が、医療情報学分野には熊本大学医学部附属病院医療情報経営企画部から廣瀬準准教授が、脳神経外科学分野には京都大学脳神経外科から高木康志准教授が、10月1日付でそれぞれ教授として着任されました。新たな陣容でなお一層の改革を推進する覚悟ですので、引き続き何卒よろしくお願いたします。

目次

CONTENTS

巻頭言	1	受賞者紹介	10
海外留学体験記	2	第69回西日本医科学学生総合体育大会	10
医学部行事予定	4	平成29年度臨床実習後OSCE成績優秀者	11
リサーチマインド育成の取り組み	5	白衣授与・Student Doctor認定証授与式	11
栄養学科から医科栄養学科になって	6	学遊抄	12
保健学科における海外交流の総括	7	寄附講座『地域消化器・総合内科学分野』紹介	12
オープンキャンパス	8	数字で見る医学部	13
学生委員会から	9	新任教職員ご挨拶	14
教務委員会から	9	退職者ご挨拶	14
徳島医学会報告	10	編集後記	14

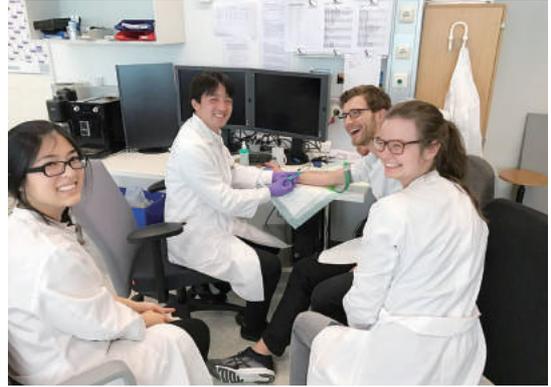
海外留学体験記

ハノーバー医科大学 交換留学プログラム 報告

医学科5年 藪野 淳也

私は今年度4月の1ヶ月間、Medizinische Hochschule Hannover (MHH) の Klinik für nuklearmedizin (核医学科) で学外選択実習に行ってきました。PET/CT、SPECT、シンチグラフィなど日本で行われている診断のほか、日本ではあまり行われていない、そしてドイツで盛んに行われている、前立腺癌に対する PSMA Ligand Therapy や、肝がんに対する Selective Internal Radiation Therapy (SIRT) など様々な手技や治療を見学することができました。医師と患者のやりとりはもちろんドイツ語で行われたのですが、先生方は英語が流暢なこともあり英語ですべて説明してくれたり、患者さんも非常に協力的で日本に対して興味を持ってくれたりなど素晴らしい環境であり、ドイツのみなさんの温かさを感じました。さらに実習で医療について学ぶだけでなく、MHH の学生や欧州各国からの留学生と交流する機会もあり、とても刺激的な毎日でした。お互いの国について様々な話をしたり、一緒に観光したりと親睦を深めることができました。

このドイツでの貴重な経験は、医療人としての私の将来に非常に重要なものとなっていくと確信しています。このような機会を与えてくださった諸先生方、そして関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



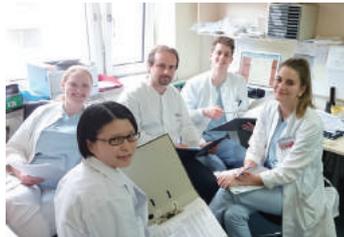
同時期に実習をしていた MHH の学生との採血練習

医学科5年 吉原 美沙子

今年の4月、ハノーバー医科大学 (MHH) 神経内科に留学しました。1ヶ月の間、Stroke Unit、神経内科病棟、神経生理学検査室を回りました。ドイツ語の挨拶しか学んでいなかった私にとって、ドイツの大病院で実習することは不安でしたが、実際には多くのことを学ぶことができました。

病棟実習では、神経内科の先生に英語の話せる患者さんを紹介していただき、一人で問診、神経診察などをさせていただきました。また、日本では稀な疾患や、日本と異なる治療法を経験することができました。

週末には、様々な国の医学生や他の大学の留学生と、旅行やドイツ料理、お花見、カラオケ、MHH パーティーなど非常に楽しい時間を過ごしました。今まで日本以上に住みやすい国は無



MHH Neurology staff room

いと思っていましたが、ドイツは日本人にとって本当に住みやすい国だと感じました。

他にもドイツと日本の違いや、留学中感じたことは多々ありますが、また留学報告会などの機会により詳しく、徳島大学の皆様、特にハノーバー医科大学への留学をこれから考えている方々に、この度の経験を伝えられたらと思っています。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった諸先生方、お世話になりました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



MHH Neurology 集合写真

医学科5年 川村 晨

私は、4月の1ヶ月間、ドイツのハノーバー医科大学 (MHH) 神経内科学分野で臨床実習に参加させて頂きました。

神経内科一般病棟で1週間、脳卒中ユニット (SCU) で3週間、



実習しました。神経内科病棟では、筋萎縮性側索硬化



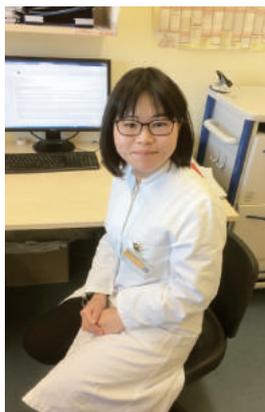
症 (ALS) や多発性硬化症など難病患者の診察を経験し、SCU では、救急車で運ばれてくる脳卒中患者の初期診察を見学しました。また休日は、ベルリンやハンブルクなどの近郊都市に旅行したり、ドイツの学生にホームパーティーに招待していただいたりしました。

今回の留学で強く記憶に残ったことは、MHH の学生はとても能動的に実習に参加していたことです。MHH では2年次から附属病院での実習が始まるので、5年次には静脈血採取はもちろん、腰椎穿刺なども行っていました。上級医や看護師からも戦力として認められている同じ5年生の姿を見て、世界のライバルはこんなにやっているのだから、与えられたノルマに執われず、能動的に実習しようと思いました。

このような貴重な機会を与えてくださった野寺先生を始め、協力していただいた全ての皆様に厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

医学科6年 金谷 実華

選択実習Ⅱとしてドイツのハノーバー医科大学の神経内科分野で実習を行いました。ドイツ語ばかりの環境で大変でしたが、病棟で様々な症例や検査などを経験することができ、自分で採血も行いました。ボトックス外来で患者さんと握手をするなどの日本との違いを感じました。実習中に先生と気軽に話しをしたり、一緒に昼食をとるなど日本よりも近い距離で先生と関わることができました。そして現地の医学生のレベルの高さには圧倒さ



れました。様々な人種の患者さんがおり、ドイツにおける人種の多様性を肌で感じました。

また、放課後にスキルスラボで開催された点滴セミナーに参加し、手技の練習を行うことができました。

大学寮の友人と放課後にシティーに出かけたり、最終日にはイスラエル料理などを作るといった交流もできました。貴重な経験をさせていただき、梶教授をはじめとする臨床神経科学の先生方、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

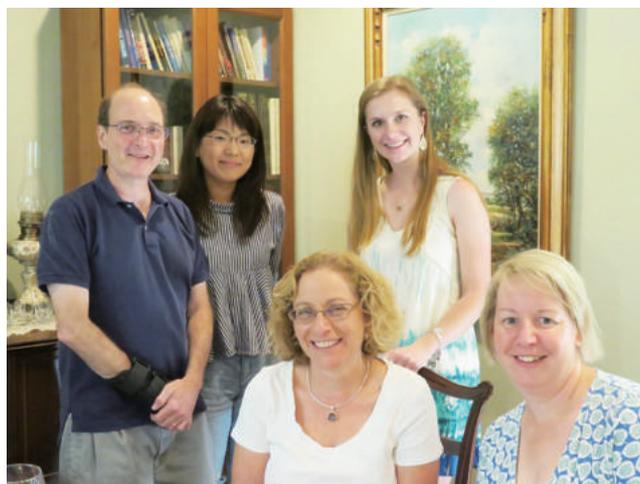


テキサス大学 サマー・リサーチ・プログラム 報告

医学科4年 杉谷 鮎美

6月下旬から2か月間、UTHealth McGovern Medical Schoolのサマー・リサーチ・プログラムに参加させていただきました。私は Department of Pathology の Dr. Actor の研究室に配属されて、糖タンパクであるラクトフェリンの TLR 経路を介したマクロファージ活性の制御について研究を行いました。配属先の先生方は、私の拙い会話にも耳を傾け、正しい意見ならそれを聞き入れて実験に反映してくれる熱心で優しい人たちでした。また、同プログラムに参加していた現地の under graduate の学生と親しくなり、休日は彼女の家で過ごしました。彼女は卒後の進路に迷っていて、聞くとアメリカ特有の医療職や医師の違いなどが分かりました。短い期間でしたが、多くのことを経験させていただき将来を改めて考える良い機会となりました。

最後に、この留学においてお世話になりました丹黒医学部長をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げます。



医学科4年 小和田 実

初めに、私は影響を受けませんでしたが、この度の巨大ハリケーンにより被災されたテキサスの方々からお見舞いを申し上げますと同時に一刻も早い被災地の復興をお祈りいたします。

この夏、テキサス大学 McGovern Medical School の Summer Research Program に参加させていただきました。私は General Surgery 部門 Dr. Kulkarni の教室に属しましたが、主に共同研究先である Anesthesia 部門 Dr. Doursout のラボで実験に従事しました。



海馬の抽出に苦勞する筆者

研究内容は「アスパラガスから抽出された化学物質がアルツハイマー型認知症の原因である神経変性を抑制し神経保護することで認知機能が改善することをモデルマウスを用いて実証する」ことでした。また、交渉の末、許可をいただき臨床医療についても見学しました。特に Memorial Herman Hospital と MD Anderson Cancer Center

は規模、設備、人員全てにおいて圧巻でした。その他、現地の大学生や他国からの留学生との交流など非常に貴重で充実した、濃い夏を過ごさせていただきました。

最後になりましたが、今回の留学にあたりお世話になりました苛原前医学部長、丹黒医学部長、徳島大とテキサス大の諸先生方、国際課、医学部学務課をはじめとする皆様に厚く御礼申し上げます。



左から Dr. Doursout、筆者、Dr. Kulkarni

フロリダアトランティック大学


 報告

保健学科看護学専攻2年 岡田 悠里亜

この春2週間、アメリカのFlorida Atlantic University (FAU) に留学することができました。初めての海外、初めての留学で右も左もわからず不安だらけのまま飛び込んだ形になったのですが、現地の方は優しさであふれていて、とても温かかったです。実際に大学の看護学科の授業を15コマ受講でき、もちろん全て英語で行われるので付いていくのに必死でしたが、日本とアメリカの授業形式・形態の違いに驚いたり、自分の知識の浅さに気付かされたりと、毎日が新鮮でした。

留学期間にできた友人やお世話になったFAUの先生方は私の一生の宝物です。もう一度、今度は英語能力も看護の知識も蓄えた状態でFAUを必ず訪れたいと思っています。留学の機会を与えてくださり、協力してくださった先生方や家族には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



保健学科看護学専攻2年 和田 優子

私は3月19日から4月3日までの約2週間、フロリダアトランティック大学 (FAU) のChristine.E.Lynn.College of Nursingに短期留学させていただきました。



FAUではケアリングなどの看護理論やラボでの看護技術の授業のほか、Boca Raton Regional Hospital や記憶障害の患者さんの施設であるMemory & Wellness Centerの見学もさせていただきました。FAUの学生とともに授業に参加しましたが、どの学生も積極的に主体的に学んでおり、とても良い刺激を受けました。病院では1年目の看護師の方とともに臨床現場での医療技術を学びました。最先端の医療機器に触れ、とても勉強になりました。

た。施設では阿波踊りを踊ったり、篠笛を披露したりして交流しました。

アメリカ滞在中はFAUの先生方の家にホームステイさせていただきました。講義の無い日にはフロリダ観光に連れて行っていただき、充実した日々を送ることができました。

最後に今回の留学にあたり大変お世話になりました、ロクシン教授、岸田教授、岩本教授、岡久准教授、村澤医学部国際コーディネーターをはじめ、多くの諸先生方に厚く御礼申し上げます。



医学部行事予定 (平成29年10月～平成30年3月)

平成29年

- 10月2日(月) 後期授業開始
- 10月6日(金) 解剖体慰霊祭
- 10月8日(日)～10月9日(月) 大学祭
- 11月1日(水) 第112回医師国家試験願書受付 (11月30日(木)まで)
試験日: 2月10日(土)～2月11日(日)
- 11月2日(木) 徳島大学開学記念日
- 11月17日(金) 第101回助産師国家試験願書受付 (12月8日(金)まで)
試験日: 2月15日(木)
- 第104回保健師国家試験願書受付 (12月8日(金)まで)
試験日: 2月16日(金)
- 第107回看護師国家試験願書受付 (12月8日(金)まで)
試験日: 2月18日(日)
- 12月8日(金) 第32回管理栄養士国家試験願書受付 (12月15日(金)まで)
試験日: 3月4日(日)
- 12月15日(金) 第70回診療放射線技師国家試験願書受付 (1月5日(金)まで)
試験日: 2月22日(木)
- 第64回臨床検査技師国家試験願書受付 (1月5日(金)まで)
試験日: 2月21日(水)
- 12月25日(月)～1月7日(日) 冬季休業

平成30年

- 1月13日(土)～14日(日) 大学入試センター試験
- 2月4日(日) 入学試験(推薦Ⅱ)
- 2月25日(日)～2月26日(月)
入学試験(前期日程)
- 3月12日(月) 入学試験(後期日程)
- 3月19日(月) 医師国家試験合格発表
- 3月23日(金) 卒業式・大学院修了式
- 3月24日(土)～3月31日(土)
学年末休業
- 3月26日(月) 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
- 3月27日(火) 診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験合格発表
- 3月30日(金) 管理栄養士国家試験合格発表



リサーチマインド育成の取り組み

統合生理学分野 教授
Student Labコーディネーター 勢井 宏 義

現在、医学科の学生は医師になるまでに4度の大きな試験を経験する。入試時のセンター試験、4年次のCBT（共用試験）、6年次の卒業試験、そして、卒業後の医師国家試験である。そのいずれもが、マークシート形式で回答するタイプの問題であり、数個の選択肢があってその中から正答を選ぶ。試験そのものは、長年にかけて多くの専門家が検討し、フィードバックを重ねながら改良されてきたものであり、完成度は高いと言える。一方、医学を含む科学は、未知なるもの（こと）への探求が基本となる。未知なるものに対して、仮説として選択肢を用意することはあっても、現実には、選択肢は存在しない。あるいは、無限の選択肢が存在するとも言える。

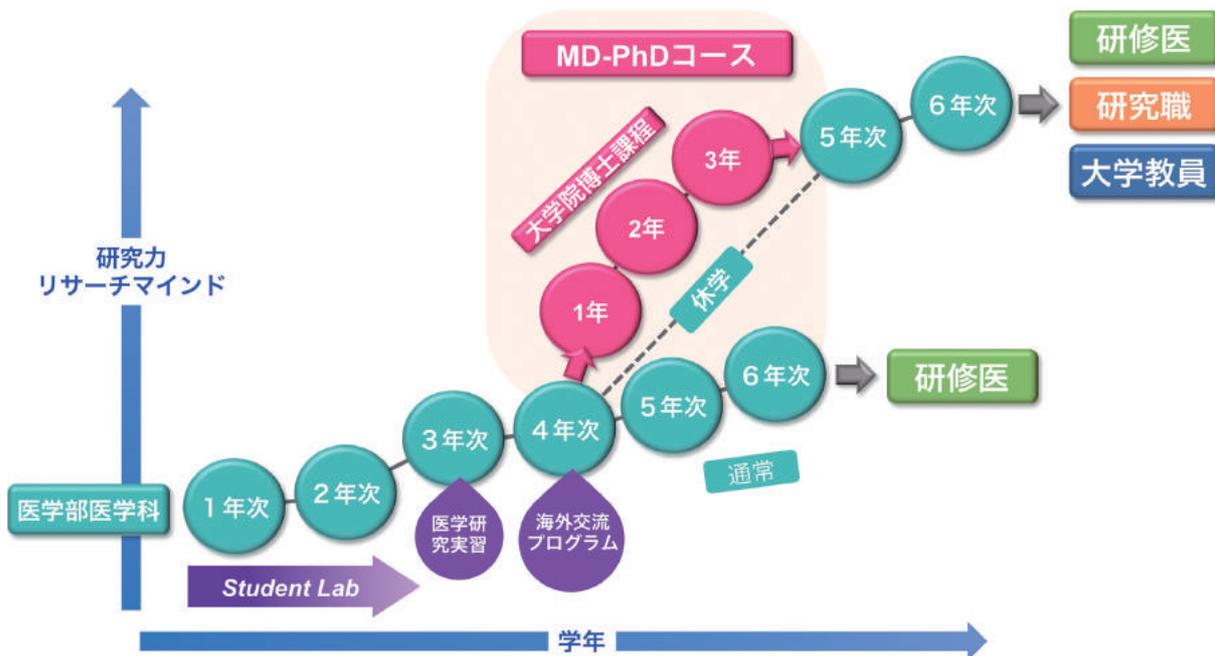
大学において科学研究を教育・実践するのは、やはり大学院である。昨今、大学院進学を希望する医学生が激減している。大学院への進学（希望）者数は、学生の研究への関心度や探求心の度合いを表すものと言える。その減少の原因には、卒後臨床研修制度や専門医制度の変革とも関連してくるが、高校から大学へ、その受験勉強のあり方にも起因するところがあるのでないだろうかと推測するのは筆者だけではないと思う。いずれにしても、既に基礎医学の後継者問題が各学会や医学部長会議、さらには、文科省においても議論されている。

このような状況に対応して徳島大学医学部は、リサーチマインドを持った医師、研究医、基礎医学研究者を増やすために、7年ほど前から、Student Lab（スチューデント・ラボ）という仕組みを立ち上げている。2010年4月発行の『医学部だより』第20号に、当時の玉置俊晃医学部長による「マニュアルを捨てよう！」という巻頭言とともに、Student Labの紹介が掲載されている。当初、学生が自主自発的に利用できる器機をそろえた現実の実験室からスタートしたが、現在は、Student Labをバーチャルな実験室として捉え、学生はそこから、自分が興味を持った分野を選択し所属するという仕組みを整えた。毎春、新入生に対してStudent Lab協力分野の研究紹介を行い、希望者はコーディネーターと相談しながら配属する分野を決め、課

外の空いた時間をその分野での研究活動に充てている。毎年1年生の15～20名がStudent Labを利用している。

徳島大学医学部の大学院には、2003年度に設立されたMD-PhDコースがある。医学科を卒業し医師免許を取得すればMD（Medical Doctor）であり、さらに、大学院を卒業し医学博士を取得すれば、PhD（Doctor of Philosophy）という肩書きが持てる。MD-PhDコースでは、医学生が4年次終了時点で休学し、飛び級的に大学院へ進学、3～4年間でPhDを取得した後、5年次に復帰しMD取得を目指す。通常とは順序が逆であるが、本コースでは、ちょうど理学部の学生が大学院を過ごすように、若い脳の時期に研究に専念し研究力を十分に身に付けることができる。研究を始めるのが20歳代前半であるか、あるいは、臨床研修も終えた30歳前後であるかは、好奇心、発想力、思考のフレキシビリティ、バイタリティなど、大きな差が出る。その研究力を生かした有望な臨床医として、また、世界的な基礎医学研究者として、あるいは、大学教員として活躍が大いに期待される。実際、本コース卒業生は、初期研修のマッチングにおいてその能力が高く評価され、選考で有利な立場にある。また、本コースの卒業生が10名を越えた昨年度、第1期生の石澤有紀講師（本学薬理学分野）を世話人として同窓会が発足した。本コースの先輩たちは、Student Lab活動を積極的にサポートしてくれている。

1～2年次の間、Student Labで経験を積み、研究への関心と理解を深め好奇心をさらに膨らませながら、3年次の医学研究実習で本格的に研究を開始する。さらに、4年次の臨床チュートリアルを介して自分の研究の臨床的意義を認識し、また、海外交流プログラムで国際的視野を広げ、そして、MD-PhDコースへ進学する。徳島大学医学部は、このようなプランをキャリアの選択肢として学生に積極的に勧めている（図）。現況は、毎年1～2名の進学者があり、それだけでもMD-PhDコースとして全国的に誇れる稼働実績と言えるが、第3期中期計画として、毎年3名の進学者数を目標としている。



栄養学科から医科栄養学科になって

医科栄養学科長（予防環境栄養学分野 教授） 高橋 章

栄養学科は、2014年に学科創設50周年を迎え「医科栄養学科」と改組し臨床系の新分野（疾患治療栄養学分野）を設立し、病院栄養部と共同で臨床栄養学の教育をより発展させる体制を構築しました。現在の栄養学は、農学を基盤としたもの、家政学を基盤としたもの、医学を基盤としたものの大きく3つに分かれます。これからの栄養学は、ヒトを対象とした栄養学に重点が置かれると考えられますが、医学的知識を基礎とした栄養学が益々重要になってくると考えられます。医科栄養学科は、医学を基盤とした栄養学の教育・研究分野では、学生と教員の質、設備の充実度において、日本とアジアでは一番であると自負しています。医科栄養学科では医学的知識と技能の習得に多くの時間を割きます。さらに近年医療分野では医療コミュニケーション力が重要視されています。そこで模擬患者様を相手にコミュニケーション力を習得するためのカリキュラムを構築します。また、蔵本地区の他学部・学科と連携して多職種連携教育にも取り組んでいます。医学部の中の医科栄養学科だからできる試みで、他の栄養士・管理栄養士養成大学では不可能に近いと考えられます。

3年生の1月から4年生の12月まで約12カ月を卒業研究として栄養学の最先端研究に触れることは大きな特徴です。この間、人間栄養学コース（基礎系）と臨床栄養学コース（臨床系）に分かれて、6名から8名ごとに各研究室に分かれます。栄養学の基礎研究と臨床研究の充実度は、他の栄養士・管理栄養士養成大学とは比べものになりません。

学部卒業生の約半数が大学院博士前期（修士）課程に進学します。残りの約半数の卒業生は病院、公務員、企業等に就職します。就職率はほぼ100%でいわゆる“売り手市場”ですので、自分にあった就職先をある程度選ぶことができます。また、大学院博士前期（修士）課程の半数が博士後期（博士）課程に進学しています。



栄養学棟

現在は、学部の“医科栄養学科”への変更が続いて、大学院の改革の途中です。我が国で最初の栄養学大学院であるという自負の下に、さらに教育・研究レベルを高めていけるように制度改革を行っています。幸いにも、栄養生命科学教育部は博士前期（修士）課程及び博士後期（博士）課程とも定員を超える学生が入学してくれていますし、その卒業生は国内外で大いに活躍されており、まさに日本の栄養学の将来を担う人材となっています。

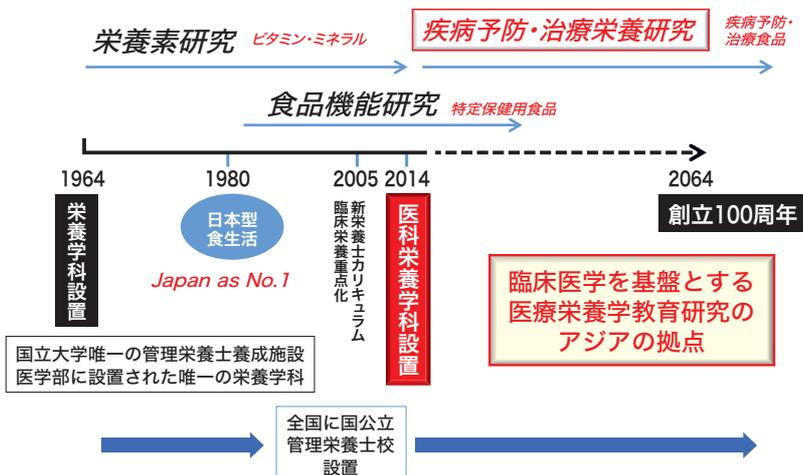
臨床栄養学研修や国内外の研究センターとの連携による人的交流などをさらに進め、疾患の原因を解明し、それを栄養学的に予防・治療しようとする研究者（スーパー管理栄養士）を育てたいと考えています。徳島大学大学院は栄養学系だけでなく、医学系、歯学系、薬学系、保健学系と健康科学に関するすべての研究コースが備えられています。その特徴を生かして、健康科学全般に通用する人材も育てています。まさに学部の1年生から大学院教育を一貫させた医科栄養学の教育体制が構築されつつあります。

大学院は、食品機能学、実践栄養学、分子栄養学、生体栄養学、予防環境栄養学、代謝栄養学、臨床食管理栄養学及び疾患治療栄養学の8分野から構成されています。大学院では、機能性食品の開発、新規臨床栄養管理法の開発、宇宙栄養学、疾患の分子的病態の解明、腸内細菌の制御による健康維持法の開発等の視点から、栄養問題の解決に取り組んでいます。また、次世代の栄養学教育研究分野を担う優秀な人材の育成、研究成果を通じた社会貢献、高度な専門知識を有し医療機関や地域社会・産業分野で活躍できる人材の育成を行っています。

さらに、世界各国からの留学生の受け入れや研究者の往来も盛んに行っており、栄養学の分野で、国際人材育成・研究センターとしてさらなる発展を続けています。

栄養学の変遷と医科栄養学科の展望

欠乏の栄養学 → 過剰の栄養学 → **オーダーメイド栄養学**



保健学科における海外交流の総括

保健学科長（ストレス緩和ケア看護学分野 教授） 雄 西 智恵美

保健学科は、平成13年10月に設置され、その基本理念のひとつに“国際的な視野をもって医療および福祉の発展を支えることのできる人材養成”が謳われています。この理念にのっとり、開設当初から国際交流の環境を整える取り組みを行ってきました。

●フロリダ・アトランティック大学などアメリカ合衆国における交流

保健学科における最初の海外交流は、フロリダ・アトランティック大学（FAU）でした。FAUは、平成7年に工学部および総合科学部において協定を締結し、今日まで活発な交流を行ってきましたが、保健学科の最初の取り組みとしては、「看護学専攻学生の海外研修」の実施でした。FAUに研究員として滞在経験のあった長篠博文名誉教授と、多田敏子名誉教授が中心となって関連各所との交渉、調整を行い、平成16年に初回の研修が実現し、6名の看護学生が参加しました。FAUの看護学部は、“ケアリング”を中心概念としたカリキュラム構成がされており、看護の質を左右する看護職のあり様としての“ケアリング”が建物にも反映されているというユニークな学部です。参加学生からは、研修を通して将来の国際交流や国際貢献への関心の高まりや看護の可能性や魅力に気付いたなどの評価が得られました。また、この研修を契機として、教員間の共同研究などを通じた交流も深まり、平成26年にはFAUからロクシン名誉教授を看護技術学分野の教授に迎え、本学科のグローバル化に向けた取り組み事業の促進が図られています。

放射線技術科学専攻における海外研修についても長篠名誉教授が中心となり、平成18年に初回の海外研修が実施されました。FAUには診療放射線技師の教育課程を有していなかったことから、FAUでの日本語を学ぶ学生との交流や医学部の見学に加えて、FAU近隣施設で病院関連と併せた研修が可能であったブロードコミュニティカレッジ、大学院に医学物理士養成課程を持つテキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンター、世界的にも先進的な放射線治療を実施しているMDアンダーソン癌センター、年によっては本学科の高尾正一郎助教（医用画像解析学分野）の留学先であったカリフォルニア大学アーバン校を組み込んだ研修を実施してきました。（写真1）



（写真1）フロリダ・アトランティック大学にて

●メトロポリア応用科学大学との交流

メトロポリア応用科学大学（MUAS）は、交換留学を活発に行っているフィンランドの公立大学です。平成22年に歯学部とMUASとの間で協定が締結されましたが、看護学分野との交流の打診があり、保健学科における学生や教員の国際化促進のためにも有意義であることから、平成23年に医学部とMUAS保健看護学部との間で部局間協定が締結されました。MUAS

との交流においては、歯学部伊賀弘起教授の支援を得て、多田敏子名誉教授を中心に進められ、看護学生の交換留学が平成23年からスタートしました。初回は本学から2名の学生がMUASに6週間の短期留学し、また、MUASの看護学生3名が保健学科に約3ヶ月の短期留学を行い、現在もこのプログラムを継続して実施しています。また、教員の共同研究も進められており、今年度はMUASと本学歯学部・医学部との共同研究として助成金を獲得することができ、保健学科からは岡久玲子准教授（地域看護学分野）が中心となって研究を進めており、両大学の交流は更なる発展をしています。（写真2）

International Exchange Program in Finland



（写真2）メトロポリア応用科学大学との交流の様子

●セントポール大学フィリピン、プリンス・オブ・ソクラ大学との交流

平成24年に提示されたミッションの再定義のひとつとして、グローバル化の推進が挙げられ、当時の近藤和也保健学科長の指揮の下、海外との多くのネットワークを持つロクシン教授および谷岡哲也教授（看護管理学分野）が中心となってアジア圏での交流の可能性を検討しました。その結果、アジアやヨーロッパなど多くの大学と連携しパートナーシップを拡大し、異文化理解や国際平和への貢献などのためにユネスコ・アソシエート・スクール・プロジェクト・ネットワークの関連団体として認識されている、セントポール大学フィリピン（SPUP）との間に、平成28年に部局間協定を締結しました。SPUPとの関係においては、学生・教員のコミュニケーション能力（英語）強化のプログラムを企画中であり、今年度は、SPUPより講師を招聘し、協定締結初回の記念事業と英語プログラムを予定しています。

プリンス・オブ・ソクラ大学（PSU）は、39の学部を持ち、多くの研究成果を挙げているタイの公立大学であり、平成26年にはPSUでの徳島大学の紹介、平成27年にはPSU看護学部長アラーニャ・チャオワリット博士、平成28年には副学長・国際交流担当のワラボン・コングスワン博士が徳島大学に來学され、看護学生への講義を行うとともに、共同研究や学生・教員との交流などについて意見交換しました。今年度には、SPUで開催されたInternational Nursing Conferenceに本学から6名の教員が参加し、研究発表を通して交流を深めつつあります。

インターネットなどの情報伝達技術の急激な発展と普及により、瞬時に様々な情報を画像や動画でも入手できる時代ではありますが、国際的視野を育むためには、五感で多様な文化や生活に触れて得られる体験に勝るものはありません。今後、更なる海外交流の環境を充実させていきたいと考えています。

オープン

Open Campus

キャンパス

医学科

8月9日水曜日の午後、大塚講堂にて医学科オープンキャンパスが開催されました。高校生245名（徳島県122名、四国他県36名、近畿69名など）と保護者182名にご参加いただきました。丹黒医学部長、赤池医学科長の挨拶の後、医学科の紹介、2つのミニ講義が行われました。ミニ講義では微生物病原学分野の野間口雅子教授と形成外科学分野の



橋本より、それぞれ基礎・臨床の立場から医師になるためにどのような素養が求められるか説明をさせていただき、その上で専門の領域について高校生に分かりやすく伝わ

るように講義をさせていただきました。高校生もその保護者も熱心に耳を傾けてくださっておりました。

その後、施設見学のために高校生は26班に分かれ、医学科生の先導により、医学科の各研究室（基礎系8・臨床系14）をはじめとして、次世代酵素学研究領域、プロテオゲノム研究領域、先端医療研究部門、医療教育開発センターの研究室や外来診察室などの見学を行いました。ご協力いただいた研究室の皆様には御礼を申し上げます。高校生が施設見学を行っている間には、保護者に対して総合教育センターアドミッション部門の植野部門長により入試説明会が行われました。その後、保護者の方々も3つの班に分かれて、スキルスラボ、外来診療棟1階ホスピタルストリート、西病棟1階待合ホールの見学を行いました。スキルスラボも病院も新しい施設で保護者の評判も良いものでした。

半日だけの体験でしたが、参加者にはこれを機会として徳島大学医学部医学科にぜひ入学したいと感じていただければ幸いです。

（医学部入試委員長（形成外科学分野 教授） 橋本一郎）

医科栄養学科

8月7日に開催予定だった医科栄養学科のオープンキャンパスは、台風5号の直撃を受け8月21日に順延しました。そのため参加者の減少が危惧されたのですが、全国から347名（高校生209名、同伴者138名）の参加者があり、ほぼ例年と同様の規模で無事開催することができました。

宮本賢一元学科長によるご挨拶の後、医科栄養学科の紹介、平成30年度入学者選抜の概要と医科栄養学科卒業生の就職状況の説明（二川（医学部入試委員））、ミニ講義Ⅰ「管理栄養士のお仕事紹介～可能性は無敵大～」(山田苑子助教(疾患治療栄養学分野))、ミニ講義Ⅱ「脂質研究のおもしろさ～脂質は本当に悪者か?～」(増田真志助教(臨床食管理学分野))が行われました。ミニ講義終了後は、高校生は大学内の医科栄養学科棟を中心とした施設案内と大学院生や学部生による各分野の紹介を、ご父兄の皆様には総合教育センターアドミッション部門の澤田麻衣子総特任講師により詳細な入試説明を行っていただきました。参加した高校生や父兄の皆様から多くの質問が出され、活発な質疑応答が行われました。

医科栄養学科に改組してから4年目を迎え、ようやく医科栄

養学科の名前と設置目的が周知されてきたように感じています。オープンキャンパスだけでなく、外部で開催される大学説明会でも多くの方が医科栄養学科のブースを訪れてくれているからです。また、アンケートなどから、国民の「健康」への関心の増大に加え、医学部にある管理栄養士養成校である（医学を基盤に栄養学を教育・研究している）ことが高校生の気持ちを捉えつつあるものと分析しております。来年の3月には医科栄養学科生として初めての卒業生を社会に送り出します。医科栄養学科への関心の増大を一過性のものにならないためにも、今後もしっかりとした広報活動を通じてともに医科栄養学科に入学された学生の期待に沿えるよう熱意をもって教育活動を行っていききたいと思います。



（医学部入試委員（生体栄養学分野 教授） 二川 健）

保健学科

台風5号が過ぎ去って間もない8月8日（火曜日）午後、予定どおり保健学科のオープンキャンパスは開催されました。厳しい暑さにもかかわらず、看護学専攻178名、放射線技術科学専攻85名、検査技術科学専攻56名とたくさんの高校生及び保護者の方に参加していただきました。徳島県内だけではなく、県外からも多くの参加がありました。大塚講堂において保健学科長の挨拶や医学部入試委員長から入学試験の概要説明が行われた後、大塚講堂や保健学科棟、スキルスラボなどで専攻別のオープンキャンパスが行われました。それぞれの専攻で知恵を出し合っ工夫をし、施設見学、専攻別相談会、体験学習などが行われました。

このうち看護学専攻では、体験実習に52名、病院見学に24名の高校生が参加しました。体験実習では聴診、血圧測定、高齢者体験、妊婦体験、おむつ交換などを実習してもらいました。また、病院見学では、外来診療棟をはじめ大学病院で看護師さんが活躍している現場を見学してもらい、新人看護師さんと触れ合う機会も得ました。体験実習や病院見学に参加できなかった高校生の皆さんには、大学の施設や入学後に学ぶ学習内容や

実習風景を編集したDVDを見ていただき理解を深めてもらいました。このほか、大学生生活を身近に感じてもらえるよう、保健学科の3年生によるパワーポイントを用いた紹介がありました。さらに、懇談会場では学部学生や教職員が一緒になって学生生活、留学、受験勉強について相談を受け付け、大変盛況でした。

ほかの専攻においてもそれぞれ工夫を凝らして特色をアピールし、将来学おべき内容や職業観について理解してもらい、有意義な半日を過ごすことができましたと思います。一人でも多くの高校生が徳島大学医学部保健学科を受験されることを願っています。



（医学部入試委員（生殖・更年期医療学分野 教授） 安井敏之）

学生委員会から

医学部学生委員長
(顕微解剖学分野 教授) 鶴尾吉宏

医学部学生委員会は、10名の教授の委員から成り、医学科の基礎系から3名(鶴尾吉宏、坂下直実、米村重信)、医学科の臨床系から2名(西良浩一、橋本一郎)、医科栄養学科から2名(竹谷豊、濱田康弘)、保健学科から3名(奥田紀久子、森田明典、遠藤逸朗)の委員で構成されています。本年度は、委員長は鶴尾吉宏が、副委員長は坂下直実先生と奥田紀久子先生が担当しています。この組織は、医学部と大学院における学生生活に関わる諸事項を審議して学生の生活を支援しています。学生の修学指導はもちろん、学内外での課外活動を監督し、奨学金貸与の選考や、表彰や懲戒に関することなどのほかに、身分異動、福利厚生、健康・保険や安全に関すること、進路、就職や留学、国際交流に関することなど学生生活に係る多数の事柄を扱っています。

この委員会の役割は、医学部の学生が上記に掲げた諸項目について快適で安全な学生生活を過ごすことができるように支援することです。但し、学生に非違行為が認められた場合には学生委員会が実情聴取などを行い学長に報告して全学の学生委員会で処分の量定を行うことがあります。本年度は、医学部では懲戒などの厳しい判断が必要とされる事例が起こっていませんので、安心していただくことができます。学生生活においては、休学願や復学願の提出が必要な場合があります、その都度相談などに当たっております。また、件数は減少傾向にありますが、学生証を紛失しましたので再発行をお願いしますと依頼を受ける場合があります。学生

証は身分証明書であると同時に、学内のセキュリティ情報も入力しており、医学科の5年次からは臨床実習のために病棟を出入りする際に必須となります。紛失後に届けを出さない場合には、再発行できない事態も生じますので、学生証は十分に注意して管理するようにお願いします。

通学に自転車がよく利用されますが、自転車の駐輪については、蔵本構内の指定の場所にきちんと駐輪することが必ずしも守られていません。特に、体育館前と隣のテニスコート前、および図書館の周囲の通路での駐輪が目につきます。通路上に駐輪すると歩行者が通行できなくなります。心配なのは、この通行障害によって、二次的に交通事故が起こる危険性が生じることです。社会的なマナーを守るといふ普段の行動によって、交通事故の発生を未然に防ぐことができることを知っておいてください。規則を守り、良いマナーで行動することは学生生活を送るには必要なことです。医療関係者として社会で仕事をする使命を受けた者であることを自覚して、大学内はもとより学外においても、常に正しい倫理観と道徳心を持って行動できるように心がけてください。

学生生活は、自主・自立が基本であり、学生には自己責任が問われます。しかし、学生生活で困った場合には、学生委員の先生方や医学部学務課の学生係に気軽に相談してください。よい解決策が見つかるように協力いたしますので、是非ご相談ください。

教務委員会から

医学部教務委員長
(法医学分野 教授) 西村明儒

我が国の教育改革の一環として、グローバル教育が小学校から大学までの全てで推進され始めているが、徳島大学医学部では、以前から医学科の専門科目として医学英語を開講し、native speakerの教員による教育を行っていた。担当教員が定年を迎えたため、昨年度からは2年生を対象に生理学実習の一部の課題を英語で行い、また、4年生を対象に診療現場における患者と医師のやりとりを英語でシミュレーションする実習を始めている。米国での診療経験を有する教員、USMLE(米国医師免許試験)受験経験を持つ教員やUSMLE合格経験のある教員が指導し、模擬患者として、米国で修学経験、学位取得経験のある技術系職員が参加し、医療面接の現場を我が国ではあまり指摘しない患者さんとの間合いの取り方や自身の向き、ラポール(心的融和状態)の示し方など、暗黙知的なものを形式知として解説し、フィードバックしながらシミュレートしている。その中には、多民族であるが故に配慮しなければならない文化や宗教に関する注意事項も含まれている。この経験は、母国語で行うクリニカル・クラークシップでも必ず役立つことと確信している。1年生では教養教育の外国語を履修し、2年生および3年生の基礎医学や社会医学では専門用語を英語やラテン語で学び、3年生の医学研究実

習では英語論文を読み、その要旨をまとめて他人の前で発表し、4年生では英語による診療シミュレーションを行うことで、入学時からの一貫したグローバル教育を提供できるのではないかと考える。その上で特に興味を持つ学生は、学生の自主的な英会話を行う集まりである「English+(プラス)」に参加したり、教養教育で用意されている語学留学に参加したり、医学部で用意しているテキサス大学やハノーバー医科大学への短期留学に参加したりしている。さらにモチベーションを高めた学生の中には、MD-PhDコースへ進学する者やUSMLEにチャレンジする者や、USMLE step 1に合格した者も現れている。

グローバル教育は、単に外国語教育を行えば良いというものではない。留学に際しては、先方の文化や宗教、現在の社会情勢について正しい知識を持つと共に歴史的関係性についても理解して臨まないと思わぬトラブルに見舞われることになりかねない。相手と自分の相違を認識しつつ、互いに認め合うことが重要であると考え。そのためには、日本の歴史、文化、宗教を学び、自らのアイデンティティを再認識することが肝要である。己を知らずして他者との相互理解などおこがましい以外の何物でもないと考える。

徳島医学会報告

■ 第255回徳島医学会学術集会（平成29年度夏期）

看護管理学分野 教授 谷岡哲也
腎臓内科学分野 教授 土井俊夫

第255回徳島医学会学術集会は、平成29年8月6日(日)に徳島県医師会館で開催された。徳島県医師会館が新しく建築されてから夏の学術集会は同所にて開催されており、今回で2回目となる。今回の大学側の担当は、腎臓内科学分野の土井俊夫教授と看護管理学分野教授の谷岡哲也が務めた。谷岡の開会挨拶に続き、第1会場(ホール)にて3名の教授就任記念講演が行われた。

最初に、地域総合医療学分野の岡久稔也特任教授による「腹水濾過濃縮再静注法の現在と今後～医工連携による医療機器開発～」、次に、医用理工学分野の森田明典教授による「正常組織の耐容線量を高める放射線防護剤の開発」、最後に、細胞生物学分野の米村重信教授による「細胞生物学からのアプローチ」の講演が行われた。

引き続き、隣接する第2会場（研修室A、研修室B・C、学習室）において、総計42演題の一般および若手のポスターセッションを通して研究成果が発表され、質疑・討論が活発に行われた。

午後からは、第1会場において、丹黒章徳島医学会会長と齋藤義郎徳島県医師会会長の挨拶の後、前回で選出された第38回徳島医学会賞および第17回若手奨励賞の授与式が行われた。徳島医学会賞は、大学側は高須千絵先生（徳島大学病院消化器・移植外科）と松島里那先生（代謝栄養学分野）に、医師会側は一原秀光先生（近藤内科病院放射線科）に授与され、若手奨励賞は、小山広士先生（徳島大学病院脳神経外科）と加納将嗣先生（徳島県立中央病院医学教育センター）に授与された。受賞記念講演として、高須先生による「転写因子制御による肝虚血再灌流障害の新たな治療法の開発」、松島先生による「頭頸部癌化学療法中の味覚異常には味覚受容体遺伝子発現が影響する」、一原先生による「大腸CTは大腸がんのスクリーニング検査に有用か」の講演が行われた。

また、合同シンポジウム「人工臓器の最近の進歩とケアリング」では、4名のシンポジストによる講演が行われた。川島病院水口潤院長による「人工腎臓の最近の進歩」、徳島大学病院ER・災害医療診療部大藤純特任教授による「体外式膜型人工肺（ECMO）の最近の進歩」、徳島大学先端酵素学研究所糖尿病臨床・研究開発センター黒田暁生准教授による「人工膵臓の最前

線とその展望」、看護技術学分野 Rozzano C. Locsin 教授による「Theory-Based Practice of Nursing in a World of Anthropomorphic Intelligent Machines」の講演が行われた。過去・現在・そして未来の人工臓器予測とハイ・テクノロジーを用いたケアリングの方法について、現状の理解が深まり多くの示唆が得られたシンポジウムであった。

その後、今回のポスターセッションの中から選考された第39回徳島医学会賞および第18回若手奨励賞が徳島県医師会の本藤秀樹先生から発表された。徳島医学会賞には、大学側は腎臓内科学分野の藤田結衣先生、医師会側はいのものと眼科内科の猪本享司院長の演題が選ばれ、若手奨励賞には、徳島大学病院卒後臨床研修センターの山口純代先生、徳島県立中央病院医学教育センターの宮本亮太先生の演題が選ばれた。

最後に、腎臓内科学分野の土井俊夫教授によって閉会の挨拶が行われ、盛況のうちに閉会した。本学術集会の開催にあたり、徳島県医師会、徳島医学会事務局、関係スタッフの皆様およびご参加・ご協力いただいた関係の皆様、心より感謝申し上げます。



◆◆ 各賞受賞者 ◆◆

■ 第255回徳島医学会学術集会(平成29年8月6日)において、第39回徳島医学会賞及び第18回若手奨励賞の受賞者が選考されました。

第39回徳島医学会賞

藤田 結衣（腎臓内科学分野）

「BMP4シグナルが作用するポドサイト障害発生機序の解析」

猪本 享司（医療法人いのもと眼科内科）

「当院におけるSGLT2阻害薬80症例での検討
-SGLT2阻害薬は最強の糖尿病腎症治療薬である-」

第18回若手奨励賞

山口 純代（徳島大学病院卒後臨床研修センター）

「リウマチ様関節炎に対する免疫抑制療法中に発症した成人T細胞性白血病/リンパ腫の1例」

宮本 亮太（徳島県立中央病院医学教育センター）

「気道緊急の一例」

第69回西日本医科学学生総合体育大会



弓道部(女子個人戦) 優勝

8月11日(金)から8月13日(日)までの日程で山口きらら博記念公園(山口県山口市)において弓道競技が行われました。女子個人戦において石谷麻衣さん(医学科6年、写真前列左)が優勝されたほか、女子団体戦3位入賞、男子優秀射技賞に輝きました。



平成29年度 臨床実習後OSCE成績優秀者

平成29年7月1日、臨床実習クリニカルクラークシップの総仕上げとして、6年生を対象とした臨床実習後OSCEを実施しました。成績が特に優秀であった学生には、丹黒医学部長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。

最優秀賞 福良 翔子

優秀賞 鳥山 貴裕、藤井 祥平、安富苗波子、南城 和正、金谷 実華、川野 道子、廣兼 桜、中村 浩之、林 篤志

部門賞(概略評価部門) 藤井 藍、大熊 尚美、庄野なほみ

部門賞(評点評価部門) 藤本 明子、島本枝里伽、藤田 圭一、西岡里枝子、久保 友紀、田村 公



白衣授与・Student Doctor 認定証授与式

医療教育学分野 教授 赤池 雅史



平成29年3月10日、大塚講堂にて、保護者の皆様のご列席のもと、医学科4年生120名を対象に、白衣授与・Student Doctor 認定証授与式が行われました。第一部では苛原稔医学部長(当時)、香美祥二副病院長からのご挨拶と実習生代表宣誓の後、学生ひとりずつに徳島大学病院のエンブレムが肩に刺繍された白衣とStudent Doctor 認定証が授与されました。第二部ではキャリア形成教育の一環として、脇昌子先生(独立行政法人静岡市立静岡病院副院長)、鎌村好孝先生(徳島県保健福祉部次長)、安倍正博先生(徳島大学大学院医歯薬学研究所血液・内分泌代謝内科学分野教授)の3名の方々のご講演が行われました。



臨床実習準備教育を修了し、全国医学部・医科大学共通の共用試験医学系 CBT (computer-based testing) と OSCE (Objective Structured Clinical Examination: 客観的臨床能力試験) に合格した医学生は、全国医学部長病院長会議により Student Doctor に認定され、指導医のもとで診療チームの一員としてクリニカル・クラークシップ(診療参加型臨床実習)の履修を開始します。診療現場での医学・医療の実践には、医学知識や技術・技能に加えて、倫理観、卓越性、ヒューマニズ

ム、責任感、利他主義等のプロフェッショナリズムを修得することが必要です。Student Doctor 認定制度は、医療プロフェッショナリズム教育の一環として、医学生が心構えと自覚を持つことを促すとともに、社会や患者さんに臨床実習へのご理解とご協力をお願いすることを目的として開始されたものです。Student Doctor に認定された医学生が、臨床実習を通して優れた医師に成長していくことができるように、これからも医学教育の改革を推進していきたいと思ひます。

学遊抄

腎臓病における診療および研究の黎明期を経験し

腎臓内科学分野 教授 土井俊夫

腎臓は身体の体液を一定にし、生体の代謝でできた老廃物を排泄し、血圧調節の中心的役割を果たすなど、生体で重要な働きをします。ただ、腎臓病の診療については、私が大学を卒業した昭和52年当時ではまだ十分に理解されてなく、未熟な段階でした。

腎臓病診断の進歩は腎生検法が確立し、蛍光抗体法や電子顕微鏡などで確定診断がつくようになった事です。その当時、蛍光抗体法はどここの施設でもできるわけではなく、私はその第一人者である京都大学病理学教室の故濱島義博教授の下で研鑽を積みました。当時の濱島教室は全国から多くの人が集まり活発に活動していました。その結果、明快に腎臓病の確定診断が可能となり、今日の腎臓病診療の基礎を築くことに貢献できたこ



研究指導を受けた NIH のボスである Dr. Gary Striker と Dr. Liliane Striker とアメリカ腎臓学会に参加し、excursion。

とを大変光栄に思っております。

治療の進歩は透析療法の確立です。昭和47年に人工腎臓（血液透析）が厚生医療、育成医療に認められ、昭和54年に腎移植が認められ、昭和59年に腹膜透析（CAPD）が認められています。このような腎不全医療における制度の進展と技術革新があり、今日の腎不全医療の確立に結び付いています。私はその間、第一線の病院で実地医家として直接に腎不全医療に関与しており、透析療法の手技の確立、合併症対策、ブロードアクセスの作成および管理にも力を注いでいました。その間、未熟な透析医療の段階から今日のように確立されるまでの間、腎不全臨床に深く関与し、貴重な経験をいたしました。

研究では、濱島教室において我が国でいち早くモノクローナル抗体を作成し、腎臓病での解析を進めていました。さらに病態の本質を追究するため、米国国立衛生研究所の Striker 博士のところに留学し、腎臓病分野において、世界に先駆けて遺伝子改変動物の作成、培養細胞の確立および遺伝子解析の手法の確立を行いました。このように研究面でもその手法の変革期を経験させていただきました。

徳島大学および京都大学における最近の主たる研究課題は、「糖尿病性腎症」です。糖尿病性腎症は我が国のみならず全世界において腎不全になる最大の原因となっています。その病態解明と診断および治療法の開発が、腎臓病における医療の未来に貢献できるよう願っております。

寄附講座『地域消化器・総合内科学分野』紹介

地域消化器・総合内科学分野 特任教授 佐藤康史
特任助教 岡崎潤

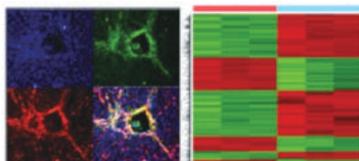
消化器診療の対象は、食道、胃、小腸、大腸などの消化管や、肝臓、膵臓などと多臓器にわたり、診療する疾患も胃炎や潰瘍、肝炎、炎症性腸疾患や機能的胃腸症などの良性疾患から悪性腫瘍まで幅広い疾患を扱います。また、吐血や下血、閉塞性黄疸などの際に行う緊急内視鏡検査は救急医療において重要な役割を担っています。

地域消化器・総合内科学分野では、徳島大学との連携により高松市民病院を中心に幅広い消化器疾患に対して専門性の高い消化器内科・総合内科診療を実践し、地域の医療に貢献するとともに、今後ますます必要とされる、しっかりとした医療を身に付け先進技術を駆使でき、かつ医師としての豊かな心を持った消化器専門医の育成を目指しています。さらに、多くの症例を経験できることから学生・研修医教育にも力を入れています。一方、近年の分子生物学の進歩により、消化器疾患の病態解明とそれに基づいた新たな治療法、診断法の開発が急速に進んでいることから、これらを駆使

した消化器疾患、特に食道、胃、大腸、膵臓、肝臓などの消化器癌を中心とした消化器病・内科疾患の病態解明・治療に関わる最先端の研究開発を推進しています。本分野は、徳島大学大学院医歯薬学研究部に平成29年3月に設置され、開設時より特任教授1名および特任助教1名で構成されています。

本講座の主要な業務ならびに現在の研究内容は以下のとおりです。

地域における消化器病学を中心とした医療貢献ならびに医学教育と人材育成、消化器悪性腫瘍に対する新規治療法の開発、新規分子標的薬を用いた食道、胃癌、大腸癌等に対する臨床試験、Liquid biopsy（血液などの体液サンプルを使って診断や治療効果予測を行う技術）を用いた癌早期診断法の開発、大腸癌の内視鏡的予防治療の開発、分子標的薬の耐性機序の解明など。



1 2 3 数字で見る医学部 7 8 9

◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

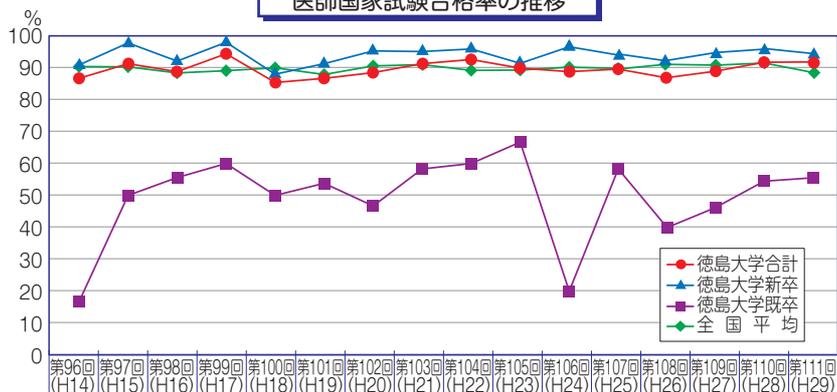
平成29年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数・入学者数調

	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	その他	現役	一浪	その他	
医 学 科	114	375	308	* 119	114	66	48	28	86	0	57	35	22	
医 科 栄 養 学 科	50	222	152	53	51	6	45	10	40	1	42	7	2	
保 健 学 科	看 護	70	304	204	74	70	1	69	36	34	0	57	9	4
	放 射	37	220	157	40	40	29	11	7	33	0	29	9	2
	検 査	17	69	60	19	19	3	16	7	12	0	17	1	1

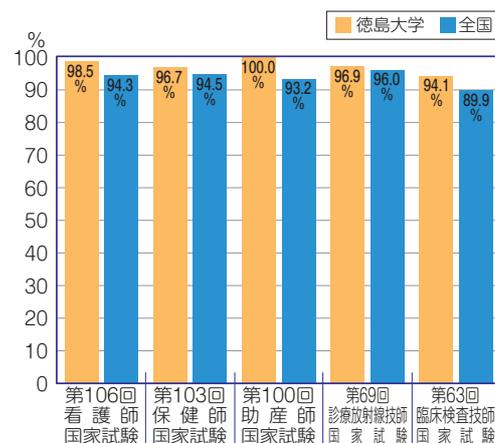
*入学辞退者 5名があったため追加合格者 5名を出したことにより、合格者が119名となった。

◆ 国家試験

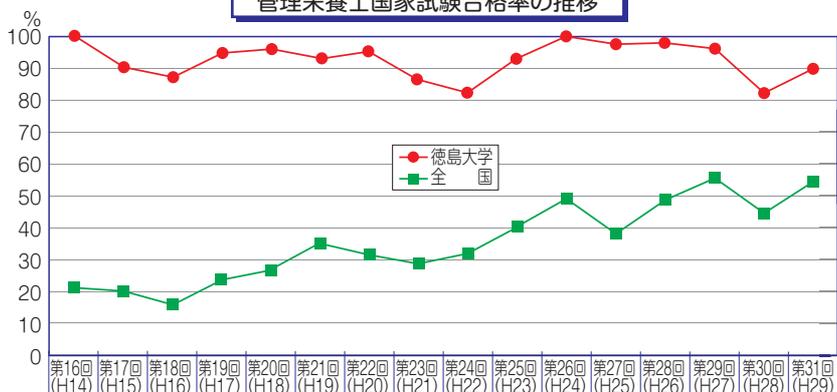
医師国家試験合格率の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格率の推移



◆ 科研費採択状況（医学部・病院の合計）

(平成29年7月1日現在)

研究種目名	平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度	
	件数	金額(千円)										
特定領域研究	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究 (A)	0	0	0	0	1	8,200	1	11,700	1	11,700	1	5,500
基盤研究 (B)	18	80,700	16	68,200	19	74,600	16	65,000	19	68,700	13	41,600
基盤研究 (C)	90	109,200	96	113,100	92	111,700	97	120,400	103	125,600	106	117,000
挑戦的萌芽研究	25	31,400	22	27,800	16	21,200	17	22,600	21	25,500	10	11,800
挑戦的研究 (開拓)											0	0
挑戦的研究 (萌芽)											2	4,800
若手研究 (S)	1	12,800									0	0
若手研究 (A)	3	11,500	1	5,400	3	20,300	3	14,700	4	31,600	4	16,300
若手研究 (B)	50	77,100	56	79,500	44	57,500	53	74,400	57	73,800	50	68,500
研究活動スタート支援	8	9,500	7	7,700	7	7,500	8	8,600	6	6,800	1	1,000
新学術領域研究	6	43,900	5	19,500	4	14,200	1	10,900	2	14,900	3	25,800
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	3	2,700	2	1,800	2	1,900	2	1,700	4	3,400	3	2,500
国際共同研究強化							2	22,400	1	11,200	0	0
合 計	204	378,800	205	323,000	188	317,100	200	352,400	218	373,200	193	294,800

*若手研究 (S)については、平成22年度より新規募集は行われていない。
 *国際共同研究強化については、平成27年度からの新規種目。
 *挑戦的研究 (開拓)及び挑戦的研究 (萌芽)については、平成29年度からの新規種目。

新任教職員ご挨拶



地域消化器・総合内科学分野 特任教授 佐藤 康史

平成29年3月1日付けで、徳島大学大学院医歯薬学研究部地域消化器・総合内科学の特任教授を拝命致しました。私は平成4年に札幌医科大学を卒業後、同学で消化器病、消化器内視鏡、臨床腫瘍学における臨床・研究・教育に従事するとともに道内の地域医療の支援・活性化に邁進して参りました。徳島は北海道と同様に自然豊かで、

特に雪のない温暖な冬は大変過ごしやすと感じております。本講座は、徳島大学との緊密な連携により高松市民病院において専門性の高い消化器内科・総合内科診療を実践し、高松地域の医療に貢献するとともに本学において消化器癌を中心とした消化器病・内科疾患の病態解明・治療に関わる研究開発を推進することを目的としています。私は、これまでの経験を生かしこれらの目標に向けて微力ながら全力を尽くす所存ですので、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



生体機能解析学分野 教授 遠藤 逸朗

平成29年4月1日付けで生体機能解析学分野の教授を拝命いたしました、遠藤逸朗と申します。徳島生まれの徳島育ちで、高知県の病院勤務と米国でのリサーチフェローのそれぞれ2年間以外はずっと徳島での生活です。専門分野は内分泌代謝疾患および骨粗鬆症ですが、全身を診る内科医として育てていただいた本学旧第一内科での経験を活かして、保健学科においては内分泌代謝疾患に加えて、循環器疾患、腎臓病

などの病態や検査についての講義および実習を担当いたします。研究面では、遺伝子改変マウスを用いてホルモン・サイトカイン異常と内分泌代謝疾患および骨カルシウム代謝疾患の関連を検討してきました。また、糖尿病、動脈硬化、骨粗鬆症などに関する臨床研究も継続しています。高齢化社会が急速に進行する我が国において、医療人の育成および加齢医学と関連の深い骨粗鬆症、動脈硬化、代謝性疾患などの研究は今まで以上に重要となってくるものと確信しています。今後も優秀な医療人の育成とともに、基礎および臨床研究を深化させて医学部に貢献していきたいと考えていますので、よろしくお願い申し上げます。



機能解剖学分野 教授 冨田 江一

平成29年7月1日付けで機能解剖学分野の教授を拝命しました。私は三重大学医学部を卒業後、脳がどのような仕組みで形成されるのかを知ろうと、直接研究の道に進みました。京都大学大学院医学研究科で神経幹細胞の分化制御メカニズムの解明研究を行った後、高次脳機能を司る大脳皮質がどのように構築されるのかその機序を明らかにしようと考え、ドイツのマックス・ブラ

ンク神経生物学研究所に留学しました。現在も同じく大脳皮質の形成・維持・機能を制御するメカニズムの解明研究に、神経解剖学・分子生物学などの多岐に渡る手法を用いて取り組んでいます。

徳島大学では、医学部の学生さんには、ミクロ・マクロの両視点を融合させた解剖学教育を行い人体構造が包括的に理解できるよう努め、研究を志す人達には研究の楽しさ・意義や研究目標への具体的なアプローチ法などを伝えていけたら幸いです。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

退職者ご挨拶



脊椎関節機能再建外科学分野 特任教授 長町 顕弘

平成29年9月30日をもって徳島大学を退職することになりました。平成28年4月に20年ぶりに大学に復帰して1年7ヶ月が経過いたしました。この1年7ヶ月は、臨床にどっぷりついていた私にとりましては大変有意義な時間となりました。徳島大学退職後は高松市民病院に赴任すること

が内定しております。ご存じのように高松市民病院の経営状況は大変厳しいものとなっております。微力ではありますが、市民病院再建の一助となれますよう努力いたします所存でございます。

短い間ではございましたが、多くの皆様方の温かい応援をいただき、仕事ができましたことを心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



徳島大学は、学校教育法第109条第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。
(平成26年3月26日)

- 認定評価機関
独立行政法人大学評価・学位授与機構
- 認証期間 7年間
(平成26年4月1日～平成33年3月31日)

編集後記



丹黒医学部長が、冒頭に蔵本キャンパスに寄り添う眉山の風景を述べられています。徳島市のシンボルとして歴史を刻んできた眉山も我々に問いかけているかも知れません。「大学は何をすることか?」。答えは一つ、「優れた人材を養成して社会に貢献するところ」。やれお金、ベンチャー、地方創生、グローバル化、制度改革と連呼して走り回っておられる方々も大学の本来の使命を忘れていたいただきたい。本号では、医学科のリサーチマインド養成教育、医科栄養学科のスーパー管理栄養士の養成、保健学科のグローバル教育を取り上げ、日々の教育研究活動のなかで各学科が大切にされてきた人材育成の取り組みを紹介していただきました。本学を取り巻く状況はあまり芳しいものではありません。医学部長による「ピンチは考えようによっては大きなチャンスです。大学も夢を持たないといけません」という、この素朴でクサイ話が妙に心に残っています。(六反一仁)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
 広報委員 六反一仁(委員長)、赤池雅史、西村匡司、高山哲治、酒井 徹、大塚秀樹、秋山靖夫

本誌へのご意見・ご要望は、(総務係)E-mail: isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp までお願いします。
 なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9116 Fax: 088-633-9028 URL <http://www.tokushima-u.ac.jp/med/>